

島崎藤村『夜明け前』論（上）

細川正義

一 藤村と父

『夜明け前』は昭和四（一九二九）年四月の「中央公論」四月号に「序の章」が発表され、以後年四回の割で連載が開始され、昭和七年一月号で一部の連載が完了し、一月二十日付けで新潮社より単行本が発行された。同年四月より第二部が第一部同様な形で連載が開始され、一〇年一〇月で連載が完了し、十一月二十五日付けで、改めて一部、二部が新潮社より「定本版藤村文庫」の第一篇、第二篇として刊行された。その直後、青野季吉を聞き手とする一問一答形式での座談会が持たれ、そこで、藤村は『夜明け前』執筆の方法について

私はあれを書いてゐるうちに、主人公は主人公、背景は背景といふ風に考へないで、例えばそれを一つの楽器に譬へてみれば、主になるメロディとそれから伴奏のやうなもの。或る時は殆ど主になる音は極く僅かしか聞こえないで、伴奏の方が主になつて居るやうな所もある。全然主人公よりも寧ろ実際の動きのやうなものの方が主にも書かれて居る所もありますけれども、私はそれを背景といふ風にはだんだん考へなくなつたんです。（略）

やつぱり何も主人公だけを主にして、あとは背景だと、さう考へなくてもいいかと思つて参りましたね。⁽¹⁾
と述べている。この場合、「背景」とは、青山半蔵の生きた時代を指し、「主人公」とは、青山半蔵と彼を取り巻く人

物たちであるといえよう。即ち、この「青山半蔵の生きた時代」と「青山半蔵と彼を取り巻く人物たち」が「メロデー」と「伴奏」であり、それが一つになって奏でる世界が『夜明け前』の世界であるということであろう。たとえばこのことに関して三好行雄は、

藤村は「夜明け前」の登場人物を、ある種の原則にもとづいて描きわけている。まず第一に実名と仮名の問題。徳川慶喜・島津久光・武田耕雲斎らといった、明治維新前後の歴史を綴った人々、いわば歴史の時間を生きた人物が実名で登場するのに対して、主人公の青山半蔵をはじめ、父の吉左衛門、妻のお民、お民の兄青山寿平次、吉左衛門の友人伏見屋金兵衛等々の、つまり、馬籠宿を中心に展開される物語を編む人々には仮名が与えられる。仮名の人物はいうまでもなく、草叢の時間を生きた人々であり、藤村が私を通路として発見した歴史の主人公たちである。「夜明け前」の小説世界は明らかに、馬籠の物語として終始するのだが、その馬籠宿の時空と、実名の人々が織る歴史の時間との断絶や隔離を処理するために、藤村は喜多村瑞見や暮田正香のように、本来は実名で登場するはずの人間たちにあえて仮名を与え、小説的な動きかたをさせたのである。この少数の人物群は歴史の時間から出て、馬籠宿の人々と接触する役割を担っている。「夜明け前」（とくに第一部）は比喩としていえば、馬籠の生活圏を中心円とする、三重の同心円で語るにふさわしい構造をもっているのだが、このことも、私から歴史へにじりよっていった藤村の方法にとつて象徴的である。⁽²⁾

と述べている。即ち「実名」で登場する「歴史の時間を生きた人物」とその彼らの生きた「歴史の時間」が藤村の言う「伴奏」であり、「仮名」で描かれる「馬籠宿を中心に展開される物語を編む人々」が「メロデー」であって、作品は「仮名」で描かれる、即ち藤村が『夜明け前』を書くにあたって「発見した主人公たち」の「物語」を中心に、「伴奏」と「メロデー」が一つになって奏でた人間味豊かな世界が『夜明け前』の世界であるということができよう。そして三好はその青山半蔵を中心にした「馬籠宿を中心に展開される物語を編む人々」を「草叢の時間を生きた

人々」としているが、この「草叢の時間」「草叢の中」といった「草叢」の視点はテキストの中でもしばしば用いられている。例えば、次の箇所である。

中津川の友人香蔵から半蔵が借り受けた写本の中にも、このことが説いてある。それを見ると世には名も知らない隠れた人があつて、みんなが言はうとしてまだ言い得ないであることをよく言ひあらはして見せて呉れるやうな篤志家のあることが分かる。その写本の中には、こういふことが説いてある。建武の中興は上の思召しから出たことで、下々にある万民の心から起つたことではない。だから上の思召しが少し動けば忽ち武家の世となつてしまつた。ところが今度多くのものが期待する復古は建武中興の時代とは違つて、草叢の中から起つて来た。さう説いてある。草叢の中が発起なのだ。(略)

半蔵はこれを読んで復古の機運が熟したのは決して偶然でないことを思つた。彼の耳に聞きつける新しい声は、実にこの写本の筆者の所謂「草叢の中」から来たことをも思つた。〔夜明け前〕第一部 十二章(上)

ここでは「上の思召」は後醍醐天皇をさしている。それに比して、「草叢の中」は庶民をさしており、さらに言えば、青山半蔵二十三歳の嘉永六(一八五三)年から、明治十九(一八八六)年に座敷旁で狂死するまでの生涯に焦点をあてた作品の展開において、幕末から維新までの激変の時代を、馬籠の一庄屋の生き様、即ち「草叢の時間」を生きた人々に深く眼を注ぎながら描いた世界であることを示している。作品は、

勝重は師匠の口から僅かに泄れて来た忘れがたい言葉、「わたしはおてんたうさまも見ずに死ぬ」といふあの言葉を思い出して悲しく思つた。

「ふあ、もう一息だ。」

その声が墓堀りの男達の間に起る。続いて「フム、ヨウ」の掛け声も起る。半蔵を葬るためには、寢棺を横たへるだけのかなりの広さ深さも要るとあつて、掘り起される土はそのあたりに山と積まれる。強い匂ひを放つ土

中をめがけて佐吉等が鋏を打ち込む度に、その鋏の響が重く勝重のはらわたに徹えた。一つの音の後には、また他の音が続いた。

（『夜明け前』第二部 終の章上）

で閉じる。青山半蔵が幕末維新の激変の中をいかに生きてきたかという縦糸に対して、「歴史の時間」の展開を横糸にして二つを絡ませながら展開してきて、最後に半蔵を深く埋める場面で終わった作品は、まさに十川信介氏が、

半蔵という一個人の生涯と維新の動乱という歴史的な時間とは重なり合い、「おてんたうさま」を仰ぐこともできない、彼の暗さと古い自己を破壊することのみ知って新しい自己を確立する方向性を持ち、えぬわが国の昏迷とは通じ合う。しかしこの結末の総括から浮かび上がって来るのは、そのような両要素の響き合いであると同時に、両者の乖離でもある。

と述べているように、作品は縦糸と横糸を「伴奏」と「メロディ」として一つの曲を奏するように「両要素の響き合い」の中で描かれてきたが、最後になって十川氏が指摘するように「両者の乖離」を示して終わることになる。十川氏はその終わり方にこめられた作者の意図を見て、更に

半蔵を葬る鋏の響きは、彼の空転せざるをえなかった情念を鎮める弔いの声であるとともに、その「まこと」を踏みにじった「維新」や「文明開化」に対する抗議の声にはかならない。^③

と続けている。「歴史の時間」と半蔵の生涯との「乖離」を描くことで「維新」や「文明開化」に対する抗議の声」を主張しようとしたとする十川氏の見方は説得力がある。しかし、半蔵を中心とした「草叢の中」に深く眼差しを注ぎながら描いてきた作品は、けっして「歴史の時間」のありように対する「抗議」を主たる目的としてきたとはいえないのではないか。伊豆利彦氏はこのことについて、次のように述べている。

半蔵の生涯は挫折と敗北の生涯であった。しかしその生涯をつらぬく熱い精神は、その挫折と敗北の故に無意味なものとしてなげすてられるべきであろうか。藤村は維新史に抗して、敗北者を復権し、維新の現実がうらぎ

った維新の精神と理想をあきらかにするものであった。藤村はそれを、空しく葬り去られた名もなき民である父の生涯を掘りおこすことよって実現した。そのことよって、維新の現実を生きた民衆の生活と労働の姿が新しく照らし出され、維新の現実のはかつてない広さと深さで描き出された。父の生涯を探るといふ私的なとなみだが、日本の民衆の現実と革命的伝統をあきらかにし、日本の歴史と民衆の現実に根ざした「まことの革命への道」をさぐり求めるものとなったところに、『夜明け前』の世界を成立させた藤村のリアリズムの独自の意味がある。

伊豆氏は、藤村における「父と子」のことに視点を定めて述べているが、『夜明け前』を書き上った直後の昭和十（一九三五）年九月十五日の「東京朝日新聞」に藤村は、「『夜明け前』成る」と題して次のような談話記事を載せている。⁽⁴⁾

あの作は御承知のやうに、維新前後に働いた庄屋、本陣、問屋の人たちを中心に書いたものでございます。維新前後を上の方から書いた物語はたくさんある。私はそれを下から見上げた。明治維新は決して僅な人の力では出来たものではない。そこにはたくさん下積の人たちがあつた。維新といふものが下級武士の力によつて出来たものだと説く人もございますが、私はさうではなしに庄屋たちがたくさん働いてゐる。それは世の中にあまり知られてゐない。私の「夜明け前」は、まあ、歴史ちあございませんが、維新前後の歴史を舞台として働いたさうした下積の人たちを中心とした物語でございます。⁽⁵⁾

また、昭和十六（一九四一）年になつての『回顧』（父を追想して書いた国学上の私見）と題した随想の中では、父等には中世の否定といふことがあつた。もとより中世期に於ける武家幕府の開設に伴ひ王権の陵夷は争ふべからざる事実であつて、尊王の念に厚い平田派の学者達が北条・足利二氏の専横を許しがたいものとしたのは当然のことであつた。日本民族の純粹な時代を儒仏の教の未だ渡来しない以前に置いた父等が、ひどく降つた世の姿として中世を考へるやうになつて行つたのも、これまた自然の帰結であつたらう。けれども、日本全国が本来の

姿に帰り、徳川氏の大政奉還となり、明治の御代を迎へた日になつてまで、さういふ否定を固執すべきものであつたらうか。もう一度父等が本居派の人達と手を握つて、互ひに荷田、賀茂、本居等緒先人の仕事を回想し、暗くのみ考へられてゐた中世から流れ伝つたものに思いを潜めるやうな日は遂に來なかつたであらうか。わたしたちの青春の日が二度とわたしたちに來ないやうに、大和民族青春の時代は再び歸り來たらないものとして父等の眼に映じたらうか。好かれ悪しかれ、この国民が中世以来の体験を基礎とすることなしに、何処に父等は第二の春を求め得たらうか。⁽⁶⁾

と、父の生涯が「中世の否定」に「固執」したが故の失敗であつたことを述べている。換言すれば、半蔵の座敷労での狂死は、彼が強い希望と期待を抱いて懸命に生きてきたその生き様と、その「歴史の時間」としてあつた「明治維新」の展開との「乖離」を示していることは言うまでもない。その生涯を、『回想』においては「失敗の生涯」と見ていたことが窺えるが、しかし、『夜明け前』校了直後の『夜明け前』成る」での藤村の言葉は、作品はそうした半蔵の生涯を「歴史の時間」との接点で、「敗北の人生」として描き、「維新」や「文明開化」に対する抗議」として描いたのではなく、そうした矛盾と困難に満ちた幕末・維新の時代をいかに懸命に生きたかを、父正樹と、そして彼とともに生きた「草叢の中」の人たちの生涯を見据えて描いたのがこの『夜明け前』の世界であらう。以下、そうした視点に立つて、青山半蔵の人生を中心に『夜明け前』を説明していこう。

二 『夜明け前』執筆に至る道

藤村が誕生した明治五(一八七二)年、父正樹は四十三歳。文久二(一六六二)年に島崎家第一七代目の当主として家督を相続した正樹は、藤村誕生の年には、新政府によって本陣・問屋・庄屋の制度が廃止され、戸長兼学事係を

拜命している。『夜明け前』では第二部第六章でそのことが取り上げられている。そこでは藤村が自身をモデルにした四男和助誕生のことも描かれている。その中でも詳しく取り上げられているが、正樹は木曾の住民たちが長い間「五木の制度」に苦しめられてきたのを身近に感じてきたので、新政府になって制度が撤廃され、住民が暮らしやすくなることを切望していた。新政府は、さらに官木のあるところを「官林」に指定し、入山さえ許さない強攻策を打ち出してきたので、制度の撤廃と山林の開放を求めた嘆願書を明治四年に出し、六（一八七三）年には木曾谷の村々を代表して再度嘆願書を提出している。正樹はその責任を取らされる形で戸長を罷免され、小学校の学事係に任命された。以後は七年に上京、教部省考証課雇員になるが、ここでも翌年、省内の墮落に憤って同僚を打ち、辞職した。この年の十一月に、明治天皇を拝せんとして、感動のあまり、自歌をしたためた扇子を天皇の馬車に投げ逮捕されるという「猷扇事件」を引き起こし、八（一八七五）年三月より飛騨国一宮村水無神社宮司になり十（一八七七）年十月までとどまっている。そこでの生活は実に過酷で、晩年の正樹の悲劇はその水無神社宮司時代が影響しているとも言われている。『夜明け前』に、

東京から中仙道を通り、木曾路を経て、美濃の中津川まで八十六里余。更に中津川から二十三里も奥へ入らなければ、その水無神社に達することが出来ない。旅行はまだまだ不便な当時にあつて、それだけでも容易でない上に、美濃の加子母村あたりから入る高山路と来ては、これがまた一通りの険しさではない。

（『夜明け前』第二部第十一章四）

と書かれているように、水無神社は相当に困難な場所であり、しかも冬は厳寒の地でもあった。赴任したとき、正樹はまだ四十五歳の時であった。実に佻しく、厳しい状況の中での生活であったであろう。十年十二月まで勤めた正樹は、新時代への期待の一切を断念した心情を持って十一年末に故郷へ帰り、七歳になった藤村と、初めて父と子の交わりを持つようになるのである。

父の書院は表庭の隅に面して、古い枝ぶりの良い松の樹が直ぐ障子の外に見られるやうな部屋でした。赤い毛氈を掛けた机の上には何時でも父の好きな書籍が載せてありましたが、時には和算の道具などの置いてあるのを見かけたことも有ります。父はよく肩が凝ると言ふ方として、銀さんと私が叩かせられたものですが、肩一つ叩くにも只は叩かせませんでした。歴史の年号などを誦唱させました。終には銀さんも私も逃げてばかり居たものですから、金米糖を褒美に呉れるから叩けとか、按摩賃を五厘づつ遣るから頼むとか言ひました。（中略）

何ぞといふと父が私達に話して聞かせることは、人倫五常の道でした。私は子供心にも父を敬ひ、畏れました。しかし父の側に居ることは窮屈で堪りませんでした。それに父が持病の痼でも起る時には、夜眠られないと言つて、紙を展げて、遅くまで独りで物を書きました。その蠟燭を持たせられるのが私でしたが、私は唯眠くて成りませんでした。⁽⁷⁾

当時の父との思い出を語った『幼き日』の一節であるが、心身ともに深い疲弊と断念を抱いて帰省した父の孤独と寂寥を思い浮かべ、しかし一方で生涯でわずか三年しか身近に過ごすことの無かった父への懐かしさのこもった文章である。藪禎子氏が、

藤村は、みずからを「田舎者」と名乗っている。これが藤村の基盤であることはもちろん疑いないが、十代つまり自己形成期に都会にあつたということは重要である。この時期は、自分が身を置く世界に対して自覚的になると年齢でもある。（略）

藤村（九歳）が、東京でまず眼にしたのは、文明としての都市の風景である。

明治十四年、馬籠から東京まで、七日かつたという、高い峠二つを歩いて越え、その先は激しく揺れる馬車で、昼夜乗り続けに乗って、「半分夢のやうに」東京に入ったと記している。身を寄せた姉の家は、「銀座の裏側にあたる閑静な町の角にあつて、灰色な円柱の並んだ、古風な煉瓦造り」とあるが、これは後年の表現ゆえであ

る。煉瓦自体が、わが国の様式市街としての銀座のシンボルの風景であった。

追剥に脅かされたりしての昔ながらの道中の果てに身を置いたのが銀座であったというのが、いかにも象徴的である。すたれ行く山合いの街道から、日本近代文明の最先端地へ、九歳の藤村はいきなり投げ出されることになる。(略)

「京橋から銀座の通りへかけて」が、藤村の遊び場所となった。後の銀座と当然違うとはいえ、ここを遊びの空間として育った例は、近代文学史上でも稀である。僚友北村透谷も同じ泰明小学校卒業だが、ここに身を置いたのは、短い期間だった。藤村が、田舎の子であると共に東京の街の子でもあったことは、もっと注意されてよいのではあるまいか。⁽⁸⁾

と述べ、藤村の精神形成の核に「田舎の子であると共に東京の街の子でもあったこと」、この二つが常に共存していたことが重要な要素に成っていることを指摘している。藤村は、数えの十歳で上京してからは、数度の帰郷以外に、以後馬籠に住むことはなかったが、しかし生涯その故郷を懐かしいものとして繰り返し想起していたことは良く知られている。そのことについて、後年「故郷を思ふ心」と題した談話の文章で次のように述べている。

人の生涯は殆んどその出発点でまるといふことは以前から学んでゐたが、近頃殊にそれについて思ひ当ることが多い。青年時代が人間の生涯に重要な位置を占めてゐるということは言ふまでもないが、然し大体に於て人間は極く幼い少年の時代に既にその生涯の路がままるのではあるまいか。自分らの生涯、成長してから起つてくる色々な傾向も、その芽は既に八つか九つの幼年時代に萌してゐるのではあるまいか。さう思つて私は時々心に驚くことがある。だから自分の郷里がどんなに田舎で、どんなに石ころの多い土地であつても、そこに自分の幼年時代があり、その記憶が、周囲のものから引き放して考へられない位密接な関係のあるものであつて見れば、自分の生涯に及ぼす郷里の影響を軽々しく思ふわけには行かない。⁽⁹⁾

「自分の生涯に及ぼす郷里の影響」を記す藤村の心奥に、そのふるさとでの晩年の父との思い出が懐かしく思い出されていたことも想像に難くない。『ふるさと』の中に次のような記述も見られる。

祖父さんが亡くなつた当座は、父さんも左程には思ひませんでした。が、だんだん時がたつて見ると、さびしいことが分りました。国の方からの便りはありましても、祖父さんのように父さんのことを心配して細かく書いた手紙を呉れるやうな人はありませんでした。（略）なんだか国の方の空が、また次第に遠くなつたやうな気がしました。¹⁰⁰

そして、その懐かしさの中で追懐する父が、維新後の新時代に対する希望の一切を断たれ、孤独と寂寥の中で悶々と過ごす日々にあつたこと、その父を若い藤村がどのように理解していたかが推測される一文が『夜明け前』の次の箇所に見える。

足掛け四年ばかりも側に置かない子と一緒になつて見ると、和助はあまり話しもしない。父子の間にはほとほと言葉もない。たゞたゞ父は尊敬すべきもの、畏るべきもの、そして頑固なものとしてしか子の眼には映らないかのやう。この少年には、父のやうな人を都会に置いて考へることすら何か耐へがたい不調和でもあるかのやうで、やはり父は木曾の山の中の方に置いて考へたいもの——あのふるさとの家の囲炉裏はたに、祖母や、母や、あるひは下男の佐吉などを相手にして静かな日を送つてゐて欲しいとは、それがこの子の注文らしい。

（第二部、第十四章二）

父が東京の藤村のもとを訪ねるのは、明治十七（一八八四）年四月、藤村十三歳の時であつたが、その時は、父が東京にいたことが「何か耐えがたい不調和」に感じ、「木曾の山の中」にとどまっていたほしいと考へている。『夜明け前』の和助の気持ちには、若い頃の藤村の父に対する心情が重なるように思える。しかし、以後の藤村の父の記憶への反芻が次第に『ふるさと』の「鉛筆写生」に描かれたやうな懐かしさを強くしていった。その若き日の父親への反

省の思いが、『夜明け前』執筆に深く影響を与えてもいるであろう。

藤村が父のことを繰り返し想起する中で、その中でも早い時期で、しかも『夜明け前』に通じるものとして、『家』の次の箇所が指摘できる。

先祖が死際に子供へ遺した手紙、先代が写したらしい武器、馬具の図、出兵の用意を細かく書いた書類、其他種々な古い残つた物が出て来た。

三吉はその中に『黒船』の図を見つけた。めづらしさうに、何度も何度も取上げて見た。半紙程の大きさの紙に、昔の人の眼に映つた幻影が極く粗い木版で刷つてある。

『宛然——この船は幽霊だ。』

と三吉は何か思ひ付いたやうに、その和蘭陀船の絵を見ながら言った。

『僕等の阿爺が狂に成つたのも、斯の幽霊の御陰ですネ……』と復た彼は姉の方を見て言った。

お種は妙な眼付をして弟の顔を眺めて居た。

『や、こいつは僕が貰つて行かう。』

と三吉はその図だけ分けて貰つて、お雪の手紙と一緒に手荷物の中へ入れた。⁽¹⁾ (『家』下 九)

『家』のこの箇所の執筆は明治四十四(一九一一年十一月頃である。この時期は当然『夜明け前』の構想はまだ生まれていないが、『黒船』即ち、維新と父とのかわりに関心を示した箇所として注目される。「僕等の阿爺が狂に成つたのも、斯の幽霊の御陰ですネ……」と姉に語る三吉は、維新の激動の中を平田国学を学び攘夷思想を貫きながら懸命に生きて、ついに狂死した父を想起する藤村の心情を代弁してしよう。そして、犠牲者としての父、近代化の激変を乗り越えることが出来ず狂死した父、それ故により懐かしく、慕わしく感じられる父のことを更に明確な形で認識するようになるのが、姪こま子の妊娠を知つて逃れるように旅立つた渡仏体験においてであろう。渡仏体験はやが

て『新生』として書かれるが、その『新生』において注目されるのも、父の描写である。たとえば次の箇所である。

斯の侘しい冬籠りの中で、岸本の心はよく自分の父親の方へ帰つて行つた。しきりに彼は少年の頃に別れた父のことが恋しくなつた。（略）

岸本が父母の膝本を離れ、郷里の家を辞して、東京に遊学する身となつたのは漸く九歳の時であつた。十三歳の時には東京の方に居て父の死を聞いた。彼は父の側に居て暮した月日の短かつたばかりでなく、母のいつくしみを受ける間もまた短かつた。彼がしみじみと母と一緒に東京で暮して見たのは艱難な青年時代が来た頃であつて、しかも僅かに二年ほどしか続かなかつた。彼は仙台の方へ行つて居る間に母の死を聞いた。

これほど岸本は父のことに就いて幼い時分の記憶しか有たなかつた。四十四歳の今になつて、もう一度その人の方へ旅の心が帰つて行くといふことすら不思議のやうに思はれた。（略）岸本が最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた。¹²

（『新生』 上百十三）

姪の妊娠を知り、深い悔恨と罪意識に苛まれる日々、その侘しい不安と孤独のなかでの心境を岸本に託したその岸本の「少年の頃に別れた父のことが恋しくなつた」、「最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた」という心情は痛切な響きを持つ。その主人公の心境を『新生』は更に、

不思議にも斯の異郷の客舎で、岸本の心は未だ曾て行つたことの無いほど近く父の方へ行くやうに成つた。父の声は復た彼の耳の底に聞えて来た。紅い太陽が輝くといふことなしに、さながら銅盤を懸けたかのごとく暗い寒空を通過するやうな日に、凍つた石の建築物の中で旅の前途を考へて居ると、

『捨吉、捨吉』

と子供の時に聞いた父の声がもう一度彼の耳に聞えてくるやうに思はれた。

そればかりでは無い。父が生前極力排斥し、敵視した異端邪宗の教の国に来て、反つて岸本は父を見る眼をさ

へ養はれた。(略) 今になつて彼は古典の精神を持つて終始した父等が当時の愛國運動に参加したことや、学問から実行に移つたことを可成重く考へて見るやうに成つた。

(『新生』上 百十九)

と、父への仰望を強くする。そして更に、「父が生前極力排斥し、敵視した」西洋に自ら赴くことで、それを邪宗とし、戦う姿勢で生き通した父の人生の意味を改めて考えるようになったことを示している。

フランスへの旅が、藤村に父の存在をより身近なものと感じさせ、父の悲劇の人生と、それをもたらせた近代日本との関連を見据え、父がいかに生き、自分たちに何を継承したのかを確認することへの意識を明確にしていったことは、『新生』の少し前に執筆した紀行文『海へ』の中からも窺える。

・父上。私はあなたの黒い幻の船に乗つて、あなたの邪宗とせられ異端とせらるゝ教の国へ兎も角も無事に辿り着きました。この私の旅は恐らくあなたから背き去る行為であつたかもしれません。外来のものと言へば極力排斥せられ敵視せられた程の強い古典の精神をもつて終始せられたあなたが仮りに今日までも御存命で、子としての私を見まもつていて下さるとしたら、そもそも私が英語の読本を学び始めようとした少年の日にそれを私に御許し下すつたあなた自身の寛大を今さらのやうに後悔されたかも知れません。けれども私のために御心配下すつたあなたの心は長く私に残りました。そのあなたの心は私のたましいの奥底にとほる一点の灯火のやうに消えずにありました。(略) 私に取つては西洋はまだまだ黒船でございました。幻でございました。幽霊でございました。私はもつとその正体を見届けたいとぞんじました。そして自分の夢を破りたいとぞんじました。その心をもつて私は更に深く異郷に分け入り一筋の自分の細道を辿り行かうと致して居りました。⁽¹⁴⁾ (『地中海の旅』六)

・『僕は斯様な風にも考へる。印度や埃及や土耳其あたりには古代と近代としか無い、と言つた人の説には全く賛成だ。幸ひにも僕等の国には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡に成らなかつたばかりぢやない、僕等の国が今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思うよ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つても、皆封

建時代から伝はつて来たものの近代化だ。（略）

「（略）不思議さねえ、遠い外国の旅に出て来て見ると、子供の時に別れた阿爺のことなぞがしきりと恋しくなる。僕等が今日あるのも、彼様して阿爺の時代の人達が頑張つて居て呉れた御陰だ、印度あたりのやうに外来の勢力に敗けてしまはなかつた御陰だ、左様思ふと僕はあの頑固な可畏しい阿爺に感謝するやうな心持を有つて来た。多少なりとも僕等が近代の精神に触れ得るといふのは、あの阿爺達に強いものが有つたからだ。」¹⁵⁾

（「故国を見るまで」十二）

『新生』執筆開始は大正七（一九三二）年四月からであるが、その頃の心境が窺える『海へ』の「地中海の旅」「故国を見るまで」は、それぞれ大正六（一九三一）年六月、七年四月に発表されている。藤村がフランスの客舎にあって痛恨の人生を凝視する中で、まさに「幼い心に立ち帰り、「若かつた日の心持」（『新生』上頁二十八）をもつて父を懐かしく想起し、「心の苦痛を訴へたい」と思い、心のよりどころを求めようとした、父に対しての「個」の事情から、渡辺廣士氏が「父」から「国」へと問題意識が変化したことを指摘しているように¹⁶⁾、自国の「近代」形成の有りようを、自ら国外に身を置くことで相対化して見る視点を持つようになり、父を含めた「阿爺の時代の人達」が戦つてきた「西洋」の「正体を見届け」、その戦つてきたことの意義を確認しようと思つてようになっていくことが指摘できよう。そしてそのことは、『海へ』よりも更に早い時期、藤村がフランスに滞在していた大正四（一九一五）年五月十二日付けの「春を待ちつ、」（『戦争と巴里』に収録）の次の記事にも窺える。

十九世紀は旧いものが次第に頽れて行つて新しいものがまだ真実に生れなかつたやうな時だ。すべての物が統一を欲して叫びを揚げて居たやうな時だ。その中で『士族』といふ一大知識階級が減落して行つた。幾何の悲劇がそこに醸されたらう。それを読んで見たい。長谷川二葉亭、山田美妙、尾崎紅葉などの創めた言文一致の仕事を国語の統一といふ上から論じたのも読みたい。新しい詩歌が僅かに頭を擡げたのも漸く十九世紀の末のことで

ある。

「十九世紀」「士族」といふ一大知識階級が滅落、「新しい詩歌が僅かに頭を擡げた（略）十九世紀の末」、これらを探ろうとする意識が、フランスにあつて「若かつた日の心持」においての父への遡及とともに想起されていることは、注目しなければならぬであらう。

『新生』が執筆開始された大正七（一九一八）年は、第一次世界大戦の末期であり、この年の八月、日本は、日米英仏によるロシア革命への干渉としてシベリア出兵を宣言し、七万三千人の派兵を行っている。この派兵に費やした総費用は十億円にも上っている。第一次世界大戦中のインフレ政策で物価が急騰している上に、このシベリア派兵が影響して米価がこの年四倍になった。生活苦と不安で各地に米騒動が勃発し、一道三府三十二県にまで及ぶようになった。そうした社会情勢に対して藤村は後に次のような回想をしている。

新年早々こんなことを書きつける私の無作法を許して貰ひたい。どうか好い年を迎へたい、ほんたうに新しいといふ春を迎へたい、もつと青い広々とした空を見たい、そんな心持からついこんなことを書く氣になつた。旅人としての私が再び故国を見得る日を楽しみに遠く仏蘭西の方から帰つて来たのは、最早九年の前にあたる。

（略）私は世界大戦後の平和回復を祝ふといふ晩に長い提灯行列を迎へようとして町に走り出で、見たし、米騒動の空気の中にも立つて見たし、大正七年以来続きに続いたやうな激しい社会的の動揺の中にも立ちつくして見た。私は今この心持をさう簡単に言ひ尽すことが出来ない。それでも何となく自分の胸に纏まつて浮んで来るものがある。言つて見れば、あれほど改造と解放との声の高かつたにも関わらず、心から動いて居るものを見出すことの少ない時代だといふことである。それを思ふとさびしい。（略）

何といふ社会の空気の暗さだつたらう。多くの人の心を掩ふ破壊と虚無との傾向、乃至は寂寞感、それらのものは重く垂れ下がる雲のやうに、自分等の頭の上を通り過ぎたやうな氣もする。私は六七年の長い冬をその暗さ

の中に送りつけたやうな気もする。あるひは私達日本人の性情が極度の改変を敢えてしたためしのないことを云つて、私達の眼前に生起しつゝ、ある幾多の現象はなしくづしの革命であると説いた人もある。この説の当たつて居るや否やは別としても、政事に、産業に、教育に、家庭に、部分々々としての改変の起こつて来たことは争はれない。実際、私達は容易ならぬ時代を歩みつゞけて来た。(略)ただただ私達は、自分等の忍耐も、抑制も、これを來るべき春への準備のためのものと考へたい。真に夜明けと言ひ得る時のために今日までの暗さがあると考へたい。⁽¹⁸⁾

『春を待ちつ、』『大正十四年を迎へし時』

「何といふ社会の空気の暗さだつたらう」と當時を認識する作者は、同時にその困難の時への「忍耐も、抑制も、これを來るべき春への準備」ととらえている。更に同じ『春を待ちつ、』の「前世紀を探求する心」では次のように書きとめてゐる。

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間はかなり暗かつた時代のやうに思ふ。おそらく西南戦争以前の十年間はもつと暗かつたらう。私達は明治維新と共に開けて来た新時代の輝いた方面のみを見るに慣らされて、その慘憺たる光景には兎角眼を塞ぎがちであつた。さういふ真相をも読みたい。私達が唯、結果に於いて知り得るやうな父の時代をもつとよく読みたい。明治のはじめに生れて来たものは文学でも美術でも徳川時代の末にすら比較しがたいほど見劣りのする粗末なものばかりだ。明治維新の齎したものは、その一面に於いてこんな深刻な影響のあることを想ひ見ねばならない。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。(略)

実際、私達は斯ういふ時代から出發して來てゐる。一概に過去を黄金時代のやうに考へ、今日を頽廢墮落の極と見るやうなことは、私は取らない。今日の青年の激しい精神の動揺を思ふものは、もつとその由來するところを自分の内部にたづねて見ねばなるまい。⁽¹⁹⁾

『春を待ちつ、』『前世紀を探求する心』

今日の暗さは単に今日だけのものでもないし、第一次世界大戦がもたらせた影響によるものだけでもない。明治維新、そして近代日本の出発における有りようにも関わるものである。その時代を懸命に生きた「父の時代」を探り、今日の社会や青年達の精神の動揺をもたせた原因の根本、即ち「もつとその由来するところを自分の内部にたづねて見ねばなるまい」と藤村は認識している。『新生』の旅から戻って体験した大正中期以降の暗さを、それを慨嘆し痛恨するのみではなく、あるいは恥ずべき過去として隠蔽しようとするのでもなく、その出発を探り、へ私達への道へ、即ち、父への視点から更に、近代日本の形成の核のところを問おうとする意図が明確になってきていることが推測できる。

藤村が長男楠雄を馬籠に帰農させたのは大正十一（一九二二）年八月に原一平に預けてからであるが、翌年に田地を購入し、十五（一九二六）年一月末に新築なつた家に移ってから楠雄は本格的に農業に従事した生活を開始している。藤村がその新築の家を訪れたのが十五年四月であり、そのときの印象をもとに『嵐』の中に次のように書いている。

『大都市は墓地です。人間はそこには生活してゐないのです』

これは日頃私の胸を往つたり来たりする、あるすぐれた芸術家の言葉だ。（略）——あの芸術家の言草ではないが、いつの間にか墓地のような氣のして来たことを胸に浮べて見た。過ぐる七年のさびしい嵐は、それほど私の生活を行き詰つたものとした。

私が見直さうと思つて来たのも、その墓地だ。そして、その墓地から起き上る時が、どうやら、自分のやうなものもやつて来たかのやうに思はれた。その時になつて見ると、『父は父、子は子』でなく、『自分は自分、子供等は子供等』でもなく、ほんたうに「私達」への道が見えはじめた。²³

藤村にとつて息子を馬籠の地に帰農させるということは、「旧家」の復活と、故郷への憧憬という視点に加え、父

親の懐かしい記憶への遡及と、そして第一次世界大戦以後の不穏な社会情勢と、『新生』発表後世間の批判の声に吹き曝されてきた自己の救済といった意図を探ることが出来よう。

『嵐』において「大都市は墓地です」という有名なロダンの言葉を用いたこの箇所は、その「墓地」という言葉に、「故郷」であり、「家」であり、懐かしい記憶の源でありの実感を喪失したままの都会での生活、特に第一次世界大戦以降の、そして『新生』発表以降の自らの都会での生活を比してみている心情が窺えよう。そして、今、「その墓地から起き上がる時が、どうやら、自分のようなものにもやって来た」と認識する心情は、単に息子の帰農を実現し、故郷につながりを獲得したことを指すのではなく、自分たちの生命の基盤への確かな問いかけの可能性を実感している心情を読み取ることが出来る。そして更に、「父」と「子」、「自分」と「子供」という肉親の問題、「個」の問題にとどまるのではなく、「私達」への道」とは、十川信介氏が、この箇所と『夜明け前』の青山半蔵像を関連させて、「長い時の流れ」や大きな「生命」のうねりを感じさせるもの」と指摘している²⁴ところだが、まさに島崎家という「家」の論理の呪縛から真に自由な視点に立つて、「個」の問題としてではなく、近代日本の形成の有りようを尋ねようとする視点に立っていることが窺える。

『嵐』を発表したすぐ後のことを後年回想した『桃の雫』『覚書』に次のように記している。

昭和二年のはじめには、わたしはすでに『夜明け前』の腹案を立ててはゐたが、まだ街道といふものを通して父の時代に突き入る十分な勇氣が持てなかつた。といふのは、わたしの祖父や父が長い街道生活の間に書き残したのもいろいろあつたらしいのであるが、日清戦争前の大火に父の蔵書は焼けて、参考となる古い記録とても吾家にはさう多く残つてゐないからであつた。これなら安心して筆が執れるといふ氣をわたしに起こさせたのも大黒屋日記であつた。その年にわたしは一夏かかつて大脇の隠居が残した日記の摘要をつくり、それから長い仕事の支度に取りかかつた。²⁵

「昭和二年のはじめ」、即ち『嵐』発表のすぐ後にはすでに『夜明け前』の腹案が立っていたことが示されている。藤村が『ある女の生涯』を書いて、晩年の父の狂気と死を、姉園の、「時代」の堅牢な古さへの敗北の死と対置させて捉えたのが大正十（一九二一）年であった。

『もうそろそろ夜が明けさうなものですなあ。』

とお玉の旦那も宗太の方へ立つて行つて、一緒に窓の戸を開けて見た。根岸の空はまだ暗かつた。²³

と結んだ『ある女の生涯』は、『夜明け前』執筆がそう遠くないことを想起させる終わり方であつたが、『嵐』を経過して、「父」の問題を「父と子」の視点で眺めるのではなく、近代日本の出発と展開の有りようを探る視点で眺める可能性を確信したとき、本格的に「街道といふものを通して父の時代に突き入る」意思と方法を獲得できたことが推測できる。

註

- (1) 座談会「夜明け前を中心として」（青野季吉を聞き手とした座談会）「新潮」昭和十年十二月号。（『藤村全集』筑摩書房、昭和四十一年より刊行、（以下『藤村全集』とのみ記す。）第十二卷、五四八頁。）
- (2) 三好行雄「夜明け前」の反近代」「現代文学講座6・昭和の文学Ⅱ」至文堂、昭和五十年六月（三好行雄著作集第一巻『島崎藤村論』筑摩書房、二〇六頁）。
- (3) 十川信介「夜明け前」（作品鑑賞）「鑑賞日本現代文学第4巻・島崎藤村」、角川書店、昭和五十七年一〇月、二九三頁。
- (4) 伊豆利彦「夜明け前」の世界」（『民主文学』第二一六号、昭和五十年七月一日、日本民主主義文学同盟）。
- (5) 「夜明け前」成る」昭和十年九月十五日の「東京朝日新聞」。
- (6) 「回顧」（『国民学術協会』企画の叢書、中央公論社刊のための草稿、生前未発表。『藤村全集』第十三卷、四六六頁。）
- (7) 「幼き日」明治四十五年五月〜大正二年四月、「婦人画報」、原題「ある婦人に与ふる手紙」。旧版藤村全集では「生立ちの記」と改題。『微風』（大正二年四月、「緑陰叢書」第四篇）に収録。『藤村全集』第五卷、三八五頁。

- (8) 敷 禎子「藤村と東京」「国文学雜誌」第五十号 藤女子大学 平成五年三月。
- (9) 「故郷を思う心」「文芸倶楽部」大正十一年八月号（『藤村全集』第九卷、二六四頁）。
- (10) 「ふるさと」大正九年十二月、実業之日本社より初版刊行。「二八、鉛筆写生」（『藤村全集』第九卷、三八五頁）。
- (11) 『家』（『藤村全集』第四卷、三八二頁）。
- (12) 『新生』（『藤村全集』第七卷、二二〇頁）。
- (13) 『新生』（『藤村全集』第七卷、二二〇頁）。
- (14) 『海へ』『地中海の旅』中央文学 大正六年六月・一〇月（『藤村全集』第八卷、六三頁）。
- (15) 『海へ』『故国を見るまで』中央公論 大正七年四月（『藤村全集』第八卷、一一三頁）。
- (16) 渡辺廣士「島崎藤村『夜明け前』解説」『法政大学多摩論集』平成五年四月。
- (17) 『戦争と巴里』「春を待ちつ、」四、大正四年五月十二日（『藤村全集』第六卷、三九二頁）。
- (18) 『春を待ちつ、』大正十四年を迎へし時「東京朝日新聞」大正十四年一月二〇、二二日（『藤村全集』第九卷、一七一頁）。
- (19) 『春を待ちつ、』「前世紀を探索する心」東京日日新聞 大正十四年二月三日、五日（『藤村全集』第九卷、一九一頁）。
- (20) 『嵐』改造 大正十五年九月号（『藤村全集』第十卷、五〇頁）。
- (21) 十川信介、前掲書、二八九頁。
- (22) 『桃の雲』覚書「中央公論」昭和十一年一月号（『藤村全集』第十三卷、二〇三頁）。
- (23) 『ある女の生涯』新潮 大正十年七月号（『藤村全集』第十卷、一〇五頁）。